

世界に羽ばたけ！ 米山学友⑦

中国で剣の道を開く

太極拳の達人から剣道の初心者へ

「僕、太極拳を習いたい！」。小学校に上がったばかりの楊敢峰さんは、少年らしいあこがれから両親にせがみました。太極拳といえば、公園などで見かける健康体操を思い浮かべますが、本来は、高度で複雑な技術を備えた武術。楊少年は太極拳にのめり込み、やがて中国の全国大会で上位の成績を取めるほどの腕前となりました。

大学卒業後、蘇州大学体育学院の講師となり、武術指導や選手の育成に没頭していたある日、学生からこう問

いかけられました。「老師、なぜ中国には日本の剣道に似た武術がないのですか？」

現在の中国武術は、いわゆる「型」の演武を競うものが主流であり、刀剣を使った武術はあっても、日本の剣道のように相手と勝負をしたり、人間形成を目指すものではありません。「長い歴史のなかで、剣術が日中それぞれで独自の発展を遂げたのはなぜだろう。日本に行って剣道を学ぼう」と、楊さんは決意しました。

入学したのは筑波大学大学院体育研究科。同大学の剣道部は、全国からトップクラスの選手が集まる強豪チームです。中国武術の心得があるとはいえ、剣道も日本語も全くの初心者だった楊さんは、練習についていくことさえできません。師範に稽古をつけてもらおうと並んでも、先輩に先を越され、寒稽古のときなどは立ちっぱなしで、足が感覚を失うほどでした。「せっかく剣道を習うために留学しているのに……」。いら立ちから、道場を飛び出したこともありました。家に帰れば、一緒に連れてきた妻と幼い息子が「中国へ帰りたい」と泣いてい

ました。

自信と笑顔を取り戻して

あるとき、「近くの公民館で太極拳の講師を探している」と聞いた楊さんは、自分で役に立つならと引き受けました。最初の教室は、つくば市の竹園公民館。本場仕込みの指導は人気で、定員を超えて希望者が集まりました。教室は帰国まで続き、教え子は300人以上。楊さんはこのボランティアを通じ、自信と笑顔を取り戻していきました。



中国蘇州市に開設した蘇州竹園武術館で、剣道を指導する楊さん（左端）

新聞配達のアルバイトで生計を支えながらも、大学院の授業、剣道部の練習を一日も休みませんでした。剣道を始めて2年半で二段に合格、帰国時には三段に昇格。指導教官の香田郡秀准教授も舌をまくほどの素質と努力で、頭角を現しました。そして、香田先生とともに中国の大学を訪れ、学生に剣道を指導した際、「もっと教えてく

ださい！」と熱望する彼らの姿に、中国で剣道を広める手応えをはっきりと感じました。

米山奨学生に合格したのは修士課程2年生のとき。世話クラブの水戸南ロータリークラブは、研究の参考にと、日本の古武道・北辰一刀流にゆかりのある水戸東武館や、弘道館を案内するなど、心を砕きました。楊さんも、家族例会には妻子とともに参加し、息子の逸雄君が「帰りたくない」と駄々をこねるほど、いつしかクラブに親しむようになっていました。「世話クラブの皆さんのおかげで家族に笑顔が戻った」と話す楊さん。カウンセラーの高野賢会員とは、中国に帰った今も、家族ぐるみのつき合いが続いています。



よねやまだより

中国江蘇省蘇州で生まれ育った米山学友、楊敢峰さんは、太極拳をはじめとする中国武術の名手。そんな楊さんが日本の剣道を学び、中国で剣道を広めたいと、故郷で「蘇州竹園剣道倶楽部」を開きました。「竹園」の名は、日本留学時の思い出の場所、つくば市の竹園公民館にちなんでいます。現在は「蘇州竹園武術館」と名称を改め、中国人には日本の剣道を、日本人には太極拳を教え、日中交流の場にもなっています。

蘇州でただ一つの剣道場

2006年、蘇州に帰った楊さんは、すぐに剣道場を開設。道場の名前は「蘇州竹園剣道倶楽部」。日本で初めて太極拳を教えた、竹園公民館にちなんでの命名です。

道場運営の傍ら、車用芳香剤の製造工場を設立。商品化に成功したものの、納品先から代金を回収できず、1年足らずで会社をたたみました。およそ武道とは縁遠い事業への投資に懸念を抱くロータリアンもいましたが、実は奨学生時代、米山梅吉翁の生き方に感銘を受け、中国でロータリークラブを創立するための資金をためたいと考えてのことでした。

その後は、剣道場の経営に専念。生徒が集まらず苦勞しましたが、日本人に太極拳を教えるようになってからは評判が評判を呼び、昨年10月には剣道や太極拳、合気道などを教える「蘇州竹園武術館」として新たなスタートを切りました。現在では日本人57人と中国人33人が道場に通り、そのなかには、いつか日本で剣道を極めたい、と鍛錬に励む逸雄君の姿もあります。

竹園武術館を日中文化交流の拠点に

蘇州という歴史ある街で、剣道を広めようと奮闘する楊さん。その活躍を「歴史的快拳」とたたえる高野氏は、「彼のように高い志をもつ人材を、ロータリーはいつでも応援する」と、エールを送ります。

プロフィール

よう かんほう
楊 敢峰 さん

(2004 - 05年 / 水戸南RC)
江蘇省蘇州市出身。2001年来日、筑波大学大学院修士課程で学び、剣道部で香田郡秀教士八段に師事。06年に帰国し、蘇州竹園剣道倶楽部を開設。08年に蘇州竹園武術館を開き館長となる。中国武術六段、武術審判(演武・散打) 国家一級、剣道三段。



「今があるのは、日本で支えてくれた皆さんと、道場に通う生徒や保護者の皆さんが力を貸してくれたおかげ」と話す楊さん。中国人に日本の剣道を知ってもらうだけでなく、太極拳を習った日本人が、中国文化を伝えてくれることを願っています。

今年8月、世界剣道選手権大会がブラジルで開催されます。初出場となる中国代表選手のなかに、楊さんの姿があるかもしれません。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

現職の駐日韓国大使は米山学友 —— 米山学友として2人目の韓国大使に ——



晩餐会で。左から2人目が韓大使

昨年4月、第18代駐日韓国全権大使に就任した權哲賢クワンチョルヒョン氏は、筑波大学大学院博士課程在学中の3年間(1984～87年)を米山記念奨学生として過ごしました。帰国後は東亜大学教授などを務め、96年から国会議員に3回連続当選。大統領選では李明博イミョンバク氏の補佐官を務め、李政権誕生を機に、駐日韓国大使に任命されました。

韓大使は世話クラブの佐野東ロータリークラブ(第2550地区)との交流を続けており、昨年7月例会に訪れ、10月には同会員を、今年3月17日には李東建国際ロータリー(RI)会長や日本の歴代RI理事らを大使公邸での晩餐会に招き、日本のロータリーへの感謝を述べられました。学友の駐日韓国大使は、第14代の崔相龍チェサンヨン氏に次いで2人目です。